

財団設立30周年記念公開シンポジウム 講演

土の力“18cmの奇跡”

～土壌が支える人の健康～



前号に引き続き財団設立30周年記念シンポジウムのプログラムの中から、北里大学名誉教授の陽捷行^{みなみ かつゆき}氏の講演内容をご紹介します。陽先生は山口県萩市の出身で、農水省では農業の最先端の研究に携わり、北里大学では農業と医療の連携に取り組まれました。この講演では、土壌が人間と同じような生きものであること、生命の健康を支える基盤であること、さらに生業・文化・文明などとも深く関わっていることなどをわかりやすく紐解かれています。

ただ今ご紹介にあずかりました陽捷行でございます。私は神主の次男坊で、小さなお宮ですからなかなか食べられない。そこで、農水省に出稼ぎに出て、さらに北里大学に出稼ぎに出て、今日に至っております。今日の話は三五館から出版した『18cmの奇跡』に書いた内容（①土壌史、②人間圈、③土の中

の宇宙、④風にきく土にふれる）をもとに、体が健やかで心が康らかな「健康心」という、健康と精神の話をします。それを略して「健康」といいます。土がいかにしてわれわれのスピリチャリティー（精神性・霊性）に関係してくるか、先ほど帯津先生のお話（75号P4参照）にもありましたスピリチャルな問題、霊的だとか、あるいは心的だとか、むしろ美的だとか、そんな話

陽 捷行（みなみ かつゆき）

1943年山口県萩市生まれ。北里大学名誉教授、元農業環境技術研究所所長・理事長、北里大学副学長。IPCC チーフリードオナーなどを歴任。著書に『環境保全と農林業（朝倉書店）』『代替医療と代替農業の連携を求めて（養賢堂）』『農と環境と健康（清水弘文堂書房）』『18cmの奇跡（三五館）』『農医連携論（養賢堂）』など多数。



※本記事の写真は、三五館様のご協力で『18cmの奇跡』より転載させていただきました。是非あわせてお読み下さい。



をしてみたいと思います。

私の書いた『18cmの奇跡』という本のタイトルは、われわれが18cmの土壌で生きているということそのものが奇跡であるということです。世界の作土層の平均、すなわち人類が生きてするために使用できる土壌を地球の陸地表面の厚さ

いったい、どこからきたのだろう！

地球は生きているという概念があります。それは、ラブリックが1968年に出版した『地球生命圏』という本に書かれています。地球は生きているという概念「ガイア」の提唱は、多くの人々に大きな影響を及ぼすわけですが、それと同じように土の中も宇宙と同じように美しい秩序（コスモス）を維持しています。

私は子どもの頃、なぜ自分が生きているのか、どこからきたのかという疑問を持ちました。母親のお腹からきたことは知っていましたが、なぜ、人間が何代も何代も続いて生きているのかという疑問でした。その解答は実に簡単で

にしたら、たった18cmにすぎないということです。遙か46億年前に地球が誕生して、どのように人類が土と共に生きてきたか、土が生きているから私たちがいまも生きているということを感じて今日の話を聞いていただけましたら、大変嬉しく思います。

して、「毎日食っているからだ」が子供なりの問題の解決でした。

ではその食べるものはどこからくるのか。牛の肉はどうか。魚はどうかと考えました。われわれの食べている植物は土から生まれます。禽獣は牧草を食べて肉にしている。魚はというと、これも土から流れた養分が海洋の栄養素となり生きている。そうすると、牛も魚も生きものはみんな土から生産されている。とすれば、食べ物全部土からきている。ということは、人間は土からできているバケモノではないかと。こういう思いをもち、土を

学ぶため農芸化学を専攻しました。そして、ほぼ50年間の歳月が経過しました。土壌は作物を生産する以外に、様々なことを教えてくれました。それは、土壌が文学から文化・文明、芸術から哲学まで、全てのものの基盤であるということでした。それで文化土壌学という分野を設立しました。土壌は単なる食料生産の場ではない、人間のスピリチュアルの源泉であるというふうに思ったのです。

先ほど、帯津先生はスピリチュアルを酒だと仰った。そういう先生にお会いできて喜んでおりますが、孔子の言葉に「人の下なるもの其は土か！これに種えればすなわち五穀を生じ、禽獣育ち、生ける人は立ち、死せる人は入り、その功多くして言い切れない」とあるけれど、立派な方っていうのは早くからお分りになってらっしゃる。

そして、最も印象的な体験は、病んだ土壌、大地の呼吸が地球を温暖化しているという。こと。あるいは、大地の呼吸の乱れがオゾン層の破壊に

繋がっているということでした。研究の途中でこれらのことに気がつくわけです。そのことは、私どもが生きているということは、土と共同して

土壌史 History of Soil “地球の誕生”

まず土壌史という話に入ります。写真1は土壌の断面です。何の変哲もない土壌も掘ってみたらこういう層状の形態をしています。世界の作土層を平均すると18cmです。われわれが使える水は11cmです。われわれが呼吸している酸素のある対流圏の厚さは上空15kmです。そして、われわれが太陽からの紫外線避け

生きているということに繋がるわけなのです。文化や文明の元は土壌なんですね。そのことを今日、お話しできればと思います。

ていられるのは成層圏にあるオゾンで、地上に圧縮したら3mmの厚さしかないオゾン層のおかげです。その他に、われわれは500万種以上の生物の多様性によって生かされています（表1）。これらがなかったら、われわれの生命は存続しないわけです。

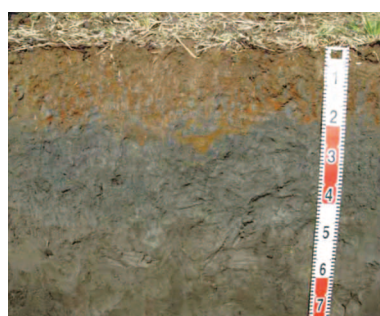


写真1 土壌断面

表1 人を生かす土・水・大気・オゾン層・生物

	厚さ	人の健康との関係
土壌	18cm	食料供給
水	11cm	食料供給
対流圏	15km	酸素供給
オゾン層	3mm	紫外線遮蔽
生物多様性	500万種以上	生態系保全

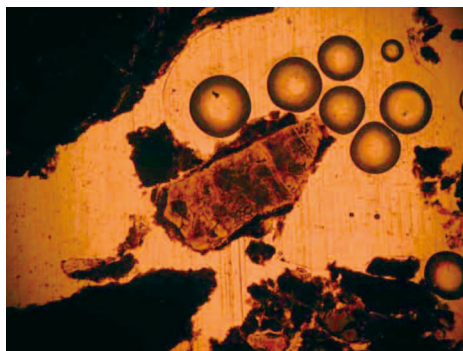


写真6 土壌中の結晶構造



写真3 マツバラン

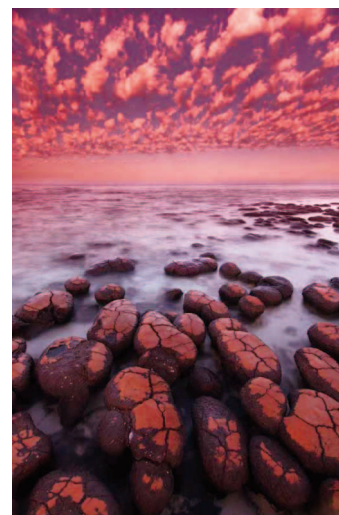


写真2 ストロマトライト

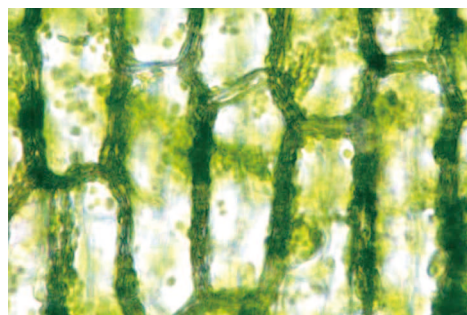


写真7 葉肉細胞



写真5 クリスタル（メキシコの洞窟）



写真4
ユタ州プライスカニオン

さて、ビッグバンが120億年前に起こって、地球は46億年前に誕生しました。その時にあったのは時間と空間と物質だけだったわけです。地球がだんだん、だんだん冷えてきますと、地殻圏ができ、大気圏ができ、それから水圏ができ、土壌圏ができ、生物圏ができてきます。その間、

46億年という広大無辺の時間が流れて現在があるわけです。実は人類が誕生する前の地球上の大気は、98%が二酸化炭素だったわけです。酸素はゼロに近い量だったのですが、その二酸化炭素は生物によってCO₂のC（炭素）が食べられ、O₂（酸素）が大気に残るわけです。そうするうちに、地球上の二酸化炭素は減り、次第に酸素が1%、2%とだんだん増えていきます。21%になってピタッと止まるわけです。正確には「ピタッ」ではないですけども。どうしても23%にならないのか？なぜ18%で止まらないのか？仮に18%で止まったとしたら、われわれは呼吸困難に陥ります。鳥は飛ぶことができません。21%を超えて22%になったら世界中が山火事です。いまの21%の酸素の量でも、自然発火がおき極めて危険な量ですが、そこで安定しているわけです。そのようにして地球ができていきますが、その初めに酸素を生成したものがストロマトライトという微生物でできた岩石です

（写真2）。今でもオーストラリアやニュージーランド近くにあつて酸素を作り続けていますが、いま主流の酸素の作り手は植物の光合成です。植物の炭酸同化作用で作られています。

そして、この地球上に初めて土や岩などができてきます。たぶん、マツバラン（写真3）に似た植物が、初めてできた微生物のあとの生物だろうと考えられています。そのようなことがあるうちに、どんだん岩石が崩壊風化（写真4）されてきます。例えば、写真5はメキシコにあります素晴らしいクリスタルの結晶ですが、このクリスタル（水晶）の結晶の中にも微生物が住んでいて、土をつくる働きをしています。

写真6は土壌の中の姿ですが、土壌の中を見ても無数の微生物と様々な形態の岩石や非晶質の部分があつて、土の中はミクロの美しい世界です。植物と同じように土の中も人間の体もよく似ています。血液が流れるようにして人間は生きていますが、



写真 10 火星



写真 9
ナミビアの野生動物

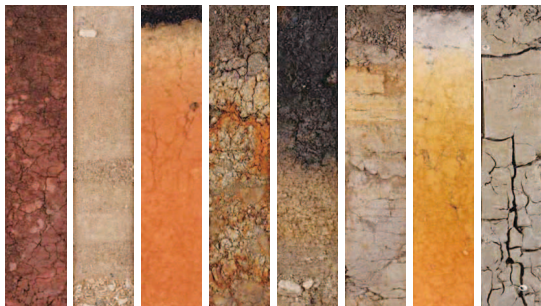
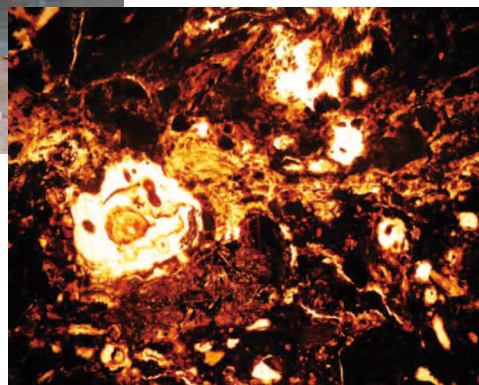


写真 11
農地土壌断面の
プロファイル

写真 8
土壌のミクロ世界



土の中も水が流れるようにして生きています。葉っぱも層を作りながら（写真7）生きています。まるで土も植物も人間と全て同じように生きています。土の中にも植物の中にも水や空気や栄養分があります。人間の体と一緒にです。

写真8もまさにミクロの世界です。土壌断面を切ってみますと、ちょうど宇宙のようにビッグバンができたような姿をしています。そして、この土が生きているからわれわれも生きていくということなんです。ご覧のように、ここにいる動物たち（写真9）も土壌が3億年も前からできはじめて、やっと植物が生育するようになって、土壌からの植物を元に生き続けています。

では、その土壌というのはどれぐらいの時間をかけてできるのでしょうか。1cmの土壌ができるのに100年から1000年かかります。私は芝生をつくるために土壌を削っている姿を見て涙がでます。あれは1000年分の土壌を一挙に無駄に使うわけです。農家の方で芝を売っ

てらっしゃる方には、何と申していいかわかりませんが、持っている財産を毎年1000年分くらい売っていることになります。

写真10は火星ですが、火星にあるのは土ではないのです。あれは岩や岩石です。土というのはその中に微生物が繁殖していて、微生物が岩や岩石と相互作用を起こし、生化学的作用などが起こることによって、初めて「土」とか「土壌」と呼ばれるものができます。「土」とは、人が手を加えていない自然の状態をいいます。土壌の「壤」というのは人間が手を加えて作物を生産し、自分たちが何かの目的で土を使うときにそれを「壤」といいます。「土」と「壤」を合わせて「土壌」といいます。

アメリカの高等学校に行きますと、2、3ページにわたって土壌のことが書かれた教科書がありますが、日本にはありません。日本では土壌はあって当たりまえだと思われています。自然の風化作用と生物の働きで、様々な土壌

ができてきます。写真11は私が理事長をやっていた筑波にある農業環境技術研究所で展示している土壌断面です。このように様々な土壌があります。例えば、右の方は水田の土壌、左のほうは黒ボクの火山灰土壌の畑というふうに様々な土壌があります。

このように土壌は、何年もかかっています。5億年前には酸素がで始め、酸素が紫外線に出会ってオゾンができてきます。オゾンによって太陽からの紫外線が減少して、海から生き物が陸に上がってきます。そこで初めて土が生成され始めます。貴重な土壌が生成されたのは、今から3億5千万年前です。そのようにして地球上に土壌が作り上げられていきました。

実は私たちが呼吸しているように、大地も呼吸しています。われわれの呼吸がおかしくなったときは病気であるし、大地の呼吸がおかしくなったのが地球の病気になります。その症状はわれわれの体が不調なときに皮膚に出るように、大気に現れます。例



写真 12 メキシコの都会

表 2 惑星の大気ガス成分

ガス組成等	金星	誕生時の地球※	火星	現在の地球
二酸化炭素 (%)	98	98	95	0.04
窒素 (%)	1.9	1.9	2.7	約 79
酸素 (%)	微量	微量	0.13	21
アルゴン (%)	0.1	0.1	2	1
温度 (℃)	477	290	-53	13
大気圧 (気圧)	90	60	64	1

例えば、化学窒素肥料をたくさん使用しますと、そこから亜酸化窒素というガスが大量に出てきます。亜酸化窒素とか二酸化炭素とかメタンガスとかというのが温室効化ガスです。それらが地球を温暖化させます。その亜酸化窒素ガスは、対流圏から成層圏に行つてオゾン層に達してオゾン層を破壊していきます。要は、大地の不健全な呼吸がわれわれの地球環境をも蝕んでいるわけです。このことを知ったことは、私が土壌を学んだ大きな成果の一つです。酸素が

ある大気は、どれほどの厚さだと思われませんか？ 対流圏にしか酸素はないわけです。よく学生に、地球からの大気圏の厚さの絵を描いてもらうと、だいたいどの学生の回答も間違っています。正しい回答は、地球の円の上をちようど鉛筆でなぞる厚さが地球上空の対流圏なのです。そこにしかな酸素はありません。地球の直径は約1万3000 km、地表から対流圏の距離は約15 km上空です。約900分の1です。頭の薄い方には大変失礼ですが、地球を頭とすれば、禿頭の皮膚くらいにしか地球の対流圏、われわれが吸っている酸素はないわけです。

46億年前にできた地球は、98%が二酸化炭素でした。そして金星が98%、火星が95%の二酸化炭素でした。ところが、地球上の酸素がドンドン増加して21%になり止まるわけです。金星と火星の二酸化炭素は相変わらず98%と95%のままです(表2)。この金星と火星の真ん中にある地球だけが、二酸化炭素は約0.04%(400ppm)で酸

素21%なのです。その確率は？ 地球物理の確率でいえば、新宿のプラットホームの夕方5時頃、目隠しをして、酔っ払って走っても誰にもぶつからないというくらいとても低い確率なのです。地球上だけ21%の酸素を持っているということは不思議な現象です。これこそ奇跡です。

人間圏 The anthroposphere

そのような地球を200(250)年前に人間が支配し始めました。産業革命です。ご覧のような大都会(写真12)には、土が何処にもありません。人間の営みを象徴するようなメキシコの街ですが、ここには大地がありません。それは何故かという人間圏が誕生した結果です。

よくご存じの、レイチェル・カーソンの著書『沈黙の春(Silent Spring)』があります。やはりこういう方は感性が高いので、土壌学を学ばなくても、土壌を触らなくても、お分かりになる。「土のはじまり、その歴史は、動物、植物

さらに強烈なのは、土壌は18 cmしかないということです。この18 cmの厚さでわれわれは古往今来、農業により食べ物をつくりながら生きてきたわけです。これからこの土壌を無視してわれわれは生きていくことができないということです。

ともちつもたれつなのだ。土は、生物がつくったのだといえなくもない。はるか、はるかむかし、生物と無生物との、不思議な秘密にみちた交わりから、土ができた。」ということを行っています。これはまちがいのない真理だろうと思います。

さあ、そんな流れの中で人間圏が何を起すかということ。ギリシャでは、人びとがブドウを採ってワインを作り豊かに生きていました。しかし、ギリシャという国は土壌を酷使し、農業生産が不可能になりました。そのため、外国に兵士を遠征させ



写真 15
不適切な灌漑による塩害と
枯れた木（ナミビア）



写真 13 モアイ像



写真 14 氾濫するガンジス川

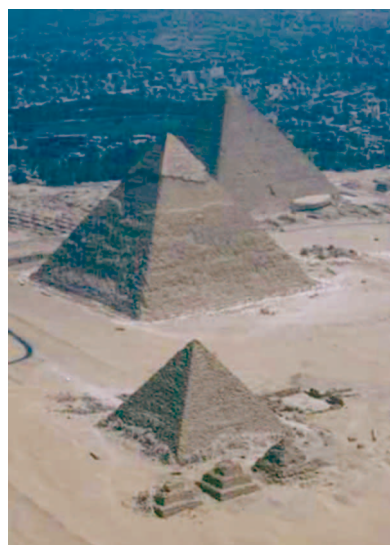


写真 16 エジプトギザ

ます。食糧の確保です。ギリシャ人は賢明な民族であったにもかかわらず20〜30代の世代を経て滅亡していきます。何故か？ 土壌を酷使し破壊したからです。当時、ギリシャが強かったのは、やはり農業

生産ができたからです。農業生産ができなくなったら、他の国に遠征に行つて食料を略奪します。他の国も食料を略奪されますと、もはや新しい食料を生産できません。

写真13はモアイ像です。モアイはあの島にある材料でこれだけ巨大な像を作りました。像を作り石を動かすために、木材を切りました。そのため、土壌が裸地と化し水とともに流れ、このモアイの文明も崩壊していきました。人間圏はこのようにして土壌を崩壊していきます。木を切ります、木を焼きます。そうすると大地は裸になって、ここに雨が降ったら大地はみんな流れていきます。

豊かな肥沃土は河川の氾濫によつてもたらされました。これは氾濫を繰り返すガンジス川の様子です（写真14）。例えば、ナイル川は豊かな土壌と養分を山奥から平地に運びました。延々と肥沃な土と養分を堆積していったのです。そこで、農業が栄えます。土壌を浸食するのは灌漑水、灌水です。農業を営むため

に、灌漑が必要です。その水が干上がったら、今まで与えていた養分がだんだん地上部にあがり、そこは塩害地となります（写真15）。水は上から下へ流れるとお考えでしょうが、水は上から下へ流れるし、下から上にも流れるし、横にも流れるのです。炎天下では、土の水は蒸発して大気に揮散していきます。土壌にあった水は地上に揮散していきます。その時、土壌にあった無機成分は水と一緒に移動します。表層の水だけが蒸発し表層には塩類だけが残って塩類化土壌ができます。その土壌はもう使えなくなりま

す。塩類化で私どもは多くの土を無駄にしました。今や写真15のように、塩類化した土壌が世界中に広がっています。土壌を略奪するだけでそれを修復せずに、ナイルの文明も土壌の崩壊とともに滅んでいきました。

ピラミッドの向こう側には、豊かな森林地帯があります（写真16）。ご存知のように、このピラミッドをつくるのに多くの木材が使用されまし

た。木を切ったために、土壌が崩壊していききました。ピラミッドの無機物の建物しかできません。ピラミッドの向こう側にはまだ豊かな大地があります。

私たちは教訓を得ました。土壌資源をなくした文明はどんどん滅んでいきます。土壌は文明をつくり、土壌の崩壊は文明を崩壊させます。ひよつとしたら、これは土壌の復讐です。われわれは土壌に倫理観を持たない限り、土壌に復讐されることになるという教訓です。

大和民族は、大変賢い民族



写真 17 奈良県宝生村（地形連鎖）

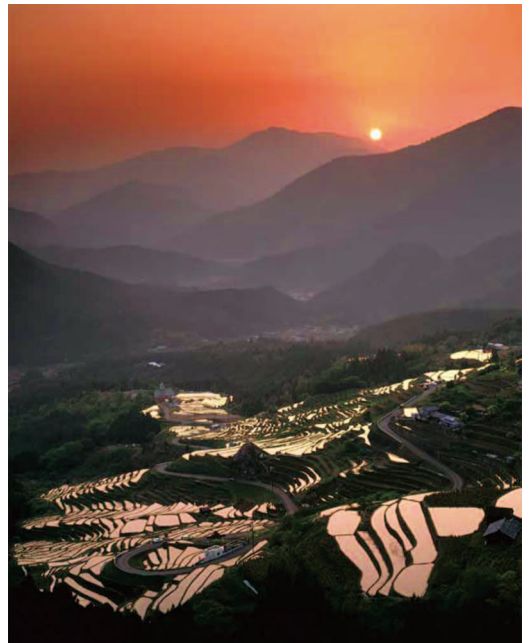


写真 18 丸山千枚田

でありました。地形連鎖（写真17）という概念をもっていました。今、日本列島を真二つに切断したと考えてください。そうすると山があり、森林があり、放牧地があり、畑があり、水田があり、河川があり、そして海に水が流れていきます。これが地形連鎖の代表的なものです。そのような地形の中で水田を作ったというのは古代人の智慧であります。上から水を通して流れてくる土壌と養分を水田で受け止めて、豊かな水田を作っていたというわけです（写真18）。伊勢神宮は神社があ

る所だけではありません。伊勢の神宮林という所から、塩田、海洋までが伊勢神宮なのです。山の養分は、河川を通して畑や水田に流れる。それを利用して塩田を作り、そして海に行くと、山の養分がわんざと流れる。ですから、伊勢湾は湧くように鰹が大量に捕れました。伊勢神宮の神殿の屋根にあるまる鰹木は、その象徴です。これもわが国土のもつ豊かな地形連鎖の結果です。それも山から流れる土壌に養分が含まれているからです。全部海に流れ去っていくば、農業生産が衰退するわ

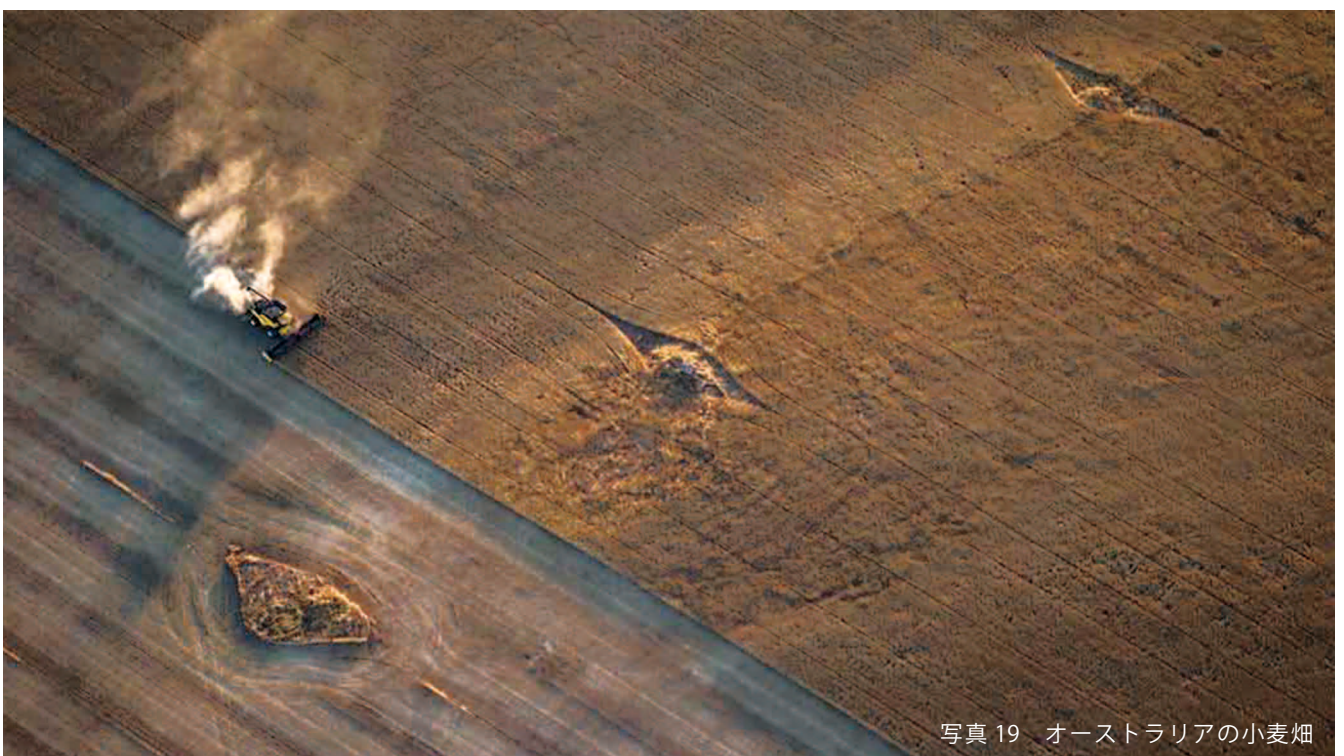


写真 19 オーストラリアの小麦畑



写真 20 広島安佐地区の土砂災害

けです。

74億の人口に食料を提供するためには、工業と同じような大量生産の大規模農業をやるしかありません（写真19）。

こうした農業を続けていくと、やはりいつか土壌が枯渇するということも目に見えています。そのためにもわれわれは、遺伝子工学などによって食料の増産を目指してきました。しかし、仮に10倍の作物が増産できたとしたら、土から10倍の養分を略奪していることになると思います。申し上げていることがお分かりと思います。

すが、土壌から養分を奪うことだけを考えると、われわれは略奪農業をやっていることになりま。

写真20は、バックビルディングフィッシュという気象災害によって起こった広島市の阿佐北区・南区の惨事です。われわれが自然生態系のことを忘れて、山の中に入り込んで家を作ったために、ドツドツと土が流れてきて被害を被った例です。バックビルディングという現象は、積乱雲が後ろにも、その後ろにも、そのまた後ろにもビルが

立ち並ぶように雲が立ち並ぶものです。集中豪雨が局所的に起こり森林を破壊して、土を流した現象です。アスワ

ン・ハイダムとか、中国の三峡ダムなんていうものも生態系を忘れて、行きすぎた開発を行った結果です。文明人は塩類土壌と砂漠を残しました。要するに略奪的で破壊的な農耕文化を定着させてきました。『土と文明』（ギル・カーター／トム・デール著）という本があります。そこには「文明の進歩とともに人間は多くの技術を学んだが（皮肉にも）

して急がない。自然は決して飛躍しない。稲を植えて、どんなに頑張っても秋の台風の頃にしか米はできません。それを急いで作ろうとしても無理な話です。これが自然です。この自然を人工の工場にしようとしたのが、われわれ近代人です。そんなことができるわけがありません。

実は土壌研究でノーベル賞を獲得した人の話は非常に少ないです。私がいた北里大学の太田先生は土壌でノーベル賞を取られました。土壌の中の放線菌です。土壌がノーベル賞を取られます。太田先生は立派な方で「ノーベル賞の半分を線虫にやりたいものだ」といつていらつしています。また、フリース・ハーバーとカール・ボッシュがノーベル賞を取っています。窒素肥料を発明した人です。それからセルマン・ワクスマン、彼は土壌から抗生物質を見つけてノーベル賞を受賞しました。

アメリカのゴア副大統領がノーベル賞を取ったときに、私にノーベル賞から感謝状が

届きました。IPCCレポートで地球温暖化に土壌が影響していることを明らかにしたことと関係しているという話です。大地の呼吸が悪くなると亜酸化窒素というガスが増え、二酸化炭素やメタンガスが増えていきます。これが地球を暖かくしている原因物質なのですが、この原因の多くは土壌呼吸が要因になっています。

みなさんご存知の金子みすゞは、山口県長門市出身ですが、こんな詩をつくっています。

「こつつんこつつん
打たれる土は
よい島になつて
よい麦生むよ。
朝から晩まで
踏まれる土は
よい道になつて
車を通すよ。
打たれぬ土は
踏まれぬ土は
要らない土か。
いえないそれは
名のない草の
お宿をするよ。」

人類の素晴らしい偉業は、天然資源を破壊に導くのがつねであつた」という教訓が書かれています。

皆さん、ご存じのように水田では、こんなに素晴らしい生きものが生息しています（次ページ写真21）。自然は、豊かで、シンプルで、美しい。自然は決

すばらしい詩ですね。私が

土について一所懸命40分くらいしゃべるよりも、このひとつの詩でもう充分ですよ。それくらいの内容があります。

保育園児が夢中でどろ遊びをする光景を昔はよく見ました。最近では、土は汚いといって嫌う保護者もいるようですが、どろんこ遊びをすれば免疫力が高まり、病気にもなりにくい。子どもは本能的にそれを知っているんですよ。例えば、田んぼの中に入り込んだ子供の、あの嬉しそうな顔。子どものあの喜びをみると、自分たちが土から生まれたことを知っているのではないかとも思えます。お母さんは怒っていますがね。東京都の大地の80%以上がコンクリートと建物で覆われています。残り20%近くが土壌に覆われています。いかに人々が土壌と関連なく生きていくかということです。そういう数値だけお伝えします。

土の健康と人の健康について考えてみましょう。人と土の健康にとって大きな問題となる土の重金属汚染は、人間

でいえば重金属摂取です。土への廃棄物はわれわれが食料と一緒に食べている添加物です。過剰の農薬使用というのは過剰の医療です。過剰の肥料というのは過剰の栄養です。それから土の成分バランスというのは人の栄養バランスです。土にとつての健全な呼吸やダイオキシンの汚染は、人にとつても健全な呼吸でありダイオキシン汚染です。地力増進とは、人間の健康増進と一緒です。

ヒポクラテスの有名な言葉があります。彼は近代医学の祖で、医学生は一番始めに彼のことを習います。「食べ物について知らない人が、どうして人の病気について理解できようか」といっています。これは土壌についていいかえることができます。「土壌について知らない人が、どうして人の病気について理解できようか」。

旧約聖書では、人間は土壌から創られます。アダムは土壌から造られます。土壌の中にはヒューマス(humus:腐植)があります。そのヒュー

マスは人間のホモとなりヒューマン(human:人間)に変わります。そして、最もすばらしいのはヒューミリティ(humility:謙虚・謙遜)という言葉が生まれました。つまり、土壌のヒューマスが人間になり、そしてヒューミリティという言葉になります。この言葉から、土壌と人間と謙虚はつながりのある事象だということが分かります。スピリチュアリティは、これらの言葉とともにある言葉なのでしよう。

もう一つ、こういう言葉を提供したいと思います。あるとき、長野の佐久平で一遍上人が別時念仏を唱えた。そのとき、不思議にも天に紫雲が現れ華が舞った。一遍の徳に天が感応したと民衆が騒ぎ出したとき、一遍は「念仏とはそういうものではない！」と民衆を叱り、次のように語ったといわれます。「華のことは華に問え、紫雲のことは紫雲に問え、一遍は知らず」。これを真似したかどうか知りませんが、松尾芭蕉が「松のことは松に習え、竹のことは



写真 21 水田の生きものたち

竹に習え」といっています。そうしたら農学者の横井時敬は「稲のことは稲に聞け、農業のことは農民に聞け」と

いっています。そこで私は「作物のことは土壌に質せ、健康のことも土壌に質せ」と申し上げたい。

時間の旅人でもある生きものは、それぞれに適した環境の中で生まれ育まれ、そして死んでいきます。この時間の旅は、それぞれの生きものの独自の環境があつてこそ成り立つものです。となると、「環境」とは生きものを生み育てると

ころの「生きもの」とみることができのです。

最後にオーストリアの哲学者イヴァン・イリイチの言葉で終わりたいと思います。「われわれ哲学者に強く求められているのは、土という者を謙虚に見下ろすことである。われわれは土の上に立っているものであり、地球の上に立っているのではない。われわれが生まれるのは土からであり、排泄物や亡骸を委ねる先もまた土なのである」。

ご静聴ありがとうございました。